

退し敵の天然防御線のドリヌモア河を突破し、敵陣にクサビを打ち込みました。米軍に幸いしたのはホーランジアから進出した米艦隊に空母二隻ありと誤解し、玉田旅団のソロン上陸とその輸送艦隊がアンボンへ退避したことで米軍は救われました。日本軍は惜しくも第一回ビアク逆上陸の絶好の機会を逃してしまいました。

六月四日ビアクに延べ三百十機の敵機が来襲し、また艦砲射撃も熾烈を極めました。待ちに待ったビアク増援渾作戦の一時中止の電報が午後入電しました。

沼田参謀長、葛目連隊長、千田少将は何が何だか判らず悲憤慷慨していました。葛目大佐は七日夕刻以降もボネックスに再び強行夜襲を行うこととしていました。

しかし、わが中枢陣地の西洞窟付近は命中弾が多く、弾丸落下の都度洞窟内は激震し、多数の戦死者を出しました。この時点での敵兵力は絶えず補充更新され常に我に数倍する圧倒的な兵力を保持しており、わが軍の劣勢は日に日に明らかでした。

艦上での戦闘が多く、陸海共同の戦争と言う感じで、島に上陸しない限り私達は手も足も出ませんでした。上陸してからも、初年兵教育や満州での訓練は役に立たず、空爆と艦砲射撃との戦いでした。

この後、戦闘は続きますが、第一次渾作戦は以上のようなものでした。

西部ニューギニア・

ハルマヘラの苦闘

茨城県 飯塚 静 男

私は、大正十(一九二一)年茨城県に生まれました。

軍歴は以下の通りです。

昭和十八(一九四三)年七月、歩兵第一〇二連隊
(茨城県水戸市) 補充隊に入隊。

八月、中支派遣軍第五十二野戦道路隊要員として水戸屯営出発。九月、中支湖北省孝感着。

十月十四日～十二月二十六日、常德作戦参加。

十二月、第二軍濠北派遣転属のため孝感出發。

昭和十九年四月「対馬丸」乗船出發。五月十五日、

西部ニューギニア・ハルマヘラ島着、第三十二師

団（楓兵団）指揮下に入る。

八月十五日、第一野戦根拠地隊司令部に転属。独立

混成第一二八旅団独立歩兵第七七〇大隊に転属

し、連合軍包囲の中、ハルマヘラ島守備。

昭和二十一年六月十日、田辺港上陸、復員。

昭和十八年七月に水戸の東部第三十七部隊に動員さ

れました。徴兵検査は昭和十六年で、友達は皆昭和十

六年の暮れから同十七年の初めには、それぞれ現役兵

は入隊しておりますが、私は兵隊検査の当時は五十一

キロという貧弱な体でしたので、第一補充兵というこ

とで待機していたのです。昭和十六年の検査で昭和十

八年の応召ですので、戦友から見ますと一年ほど入隊

が遅れています。

当時の水戸の連隊は動員兵などで大変で、とても

我々初年兵を教育するどころではなく、現地教育とな

り、漢口近くの湖北省の孝感という所へ行きました。

その部隊は工兵隊の中の第五十二野戦道路隊で、橋

架け、道路造りが主体です。私は内地におりました

時、軍需工場で設計・製造をやっておりましたので機

工兵という兵科になったのですが、そこは、石屋、大

工、鳶職などの職業の人の多い部隊でした。

常德作戦に参加しましたが、昭和十八年十二月に漢

口から上海に行き、寒い最中の一月、夏服に着替えて

ウースンの港で待機していましたが、便船の都合で内

地の宇品港に入り、そこで三カ月間の便船待ちをして

いました。ウースンから内地に還って来る時、黄海を

通り、海の色が黄色になって、「ああ、これが名に言

う黄海だな」と感じたものです。そして幸いにも敵の

魚雷攻撃もなく、ジグザグのコースを取り、宇品に上

陸しました。

全国では二十八の道路隊がありました。いずれも

工兵隊の分身です。道路隊ですから、道路ローラー、

ブルドーザー、トラックなど重量のある建設機械を

持っていましたので、なかなか便船が回ってこないの

で、宇品上陸後三カ月間は広島の旅館を点々と移動して訓練を積みつつ、南方行きを待っていました。

昭和十九年四月十五日に宇品を出発し、下関で十一隻の船団を組み、まず高雄を目指しました。高雄へ行くにもウースン沖の方を回って、魚雷攻撃を避けつつ大陸沿岸沿いに船を進めました。当時は五〇%の船が撃沈されており、私どもは、いつこの魚雷のお見舞いが来るかと、毎夜警戒していました。昼間は敵の発射した魚雷は白い波を立てながら輸送船を目がけて来るので、船は舵をいっばいに切って、船をぐるりぐらりと回して魚雷をかわせるので、昼間の場合には割合当たる率は少なかつたのですが、夜はわれわれが目で監視しただけでは発見出来ません。たまたま自分の船は沈まなかつたからいいかと思うと、すぐ隣に走っていた船が僅か五分程度で火柱を上げて沈んで行きます。そしてマニラ港へ着くまでには半分の船が無くなってしまうました。

船と運命を共にされた多くの戦友がいるのですが、

私どもは宇品からは六〇〇人、下関からは四〇〇人の兵隊が乗りました。あまり多い人数の兵隊でありませんが、航海中の三度の食事は間に合わないからと、一日二食という配給でした。水は貴重でした。

広島港を出港して乗った船は「対馬丸」でした。この「対馬丸」は七五〇〇トンの貨物船で、海軍の護衛の下に十一隻の船団を組んだのですが、この「対馬丸」は通常一二ノットで走るのに対して、船団の中の遅い船は八ノットでしたから、台湾、マニラを経て二十日間を要しました。

昭和十九年四月に、ようやく西部ニューギニアの一番端のマノクワというところへ参りました。ニューギニアは東と西のちょうど真ん中辺りがくびれた形をしています。私たちはその西部ニューギニアの港へ行くため、幸いにして一カ月で、ニューギニア島の外れのハルマヘラ島に行きました。そこは四国と同じぐらいの面積で、原住民は非常に少なく、私どもが上陸したところは、わずかに土人の集落がありました。キリスト教の礼拝堂がありました。十数戸の小さい集落の

二戸一戸の家は粗末です。椰子の葉で屋根と周りを僅かに仕切っており、中には何も所帯道具はありません。というのは、彼らは天然のバナナ、椰子、タピオカ、さつまい芋、南瓜等をただカヌーによって海岸沿いに集め歩いて食べているだけで、農耕も漁労もやらないからです。

彼らが一番不足していたのは繊維品でした。我等は工兵隊ですので、自動車のエンジンを動力にした製材工場の材木を収集するのに、土人に呼び掛け、金を払ったのでは来てくれません。一番有効であったのはマリアの薬であるキニーネと敷布でした。敷布はご婦人たちの腰を巻くために必要で、これらを報酬に出すと、喜んで労働に従ってくれました。

そのほか私どもの島にいたのはインドネシア兵です。ジャワ、スマトラ等から連れて来た人たちが随分多くいました。それに台湾から、軍属で来ていました。

私たちが上陸した当時は、敵の偵察機が時々飛来する程度でしたが、実際に爆撃等があったのは、上陸後

二カ月経った七月ごろからでした。その当時ニューギニアの戦況はかなり悪く、昭和十七年、十八年には、私ども水戸の部隊のほとんどは玉砕、四〇〇〇人の部隊も生存者は四〇人という全滅に近い状態で苦勞していました。

私どもは、その補充に参ったのですが、輸送船はこれ以上行けないということで、やむを得ずハルマヘラ島に上陸しました。その警備隊は楓兵団、千葉の佐倉を原隊とする歩兵部隊が多かったです。

昭和十九年七月以降、米軍は、ニューギニア方面が一段落ついて、日本軍の抵抗が減りましたので、私どものハルマヘラ島を目標としました。しかし、ハルマヘラ島には5万の我々の軍隊が駐屯しておりましたので、米軍の方でも、この5万の兵隊を相手にする前に、グアム島、サイパン島、ラバウルなどを攻撃したのです。

ラバウルは船の出入りのために湾の形がよく、それに山があるので、その山にぐるっと地下壕を造り、日本の兵隊が入って待機していました。ということ、

米軍はここも避けてグアム島、サイパン島、硫黄島の方へ進んだと聞いています。

私どもは上陸してまず飛行場と道路の整備をしました。たまたま下関から乗った四〇〇人の兵隊は、飛行場設営隊で、ブルドーザーが一台あるだけの非常に装備の悪い飛行場設営隊でした。その部隊長は少佐で、ある日風呂に入っている時に下士官の軍曹から手榴弾を投げつけられて五十数カ所も負傷して野戦病院に収容され、かろうじて復員して行きましたが、戦後間もなく亡くなったということです。食べ物もない、それでも飛行場の整備に精を出させるというように、部隊長があまりに兵隊を酷使していたためだとのことです。それで、その部隊の兵隊を見ますと、骨と皮ばかりの気の毒な状態の部隊でした。

私どもは物資・弾薬にシートを掛けて保管しておりましたが、突如七月に敵機二三〇機の大爆撃があり、海岸に積んで保管していた兵器・弾薬のほとんどを、この一度の空襲によって失いました。私どもの近くには飛行場があり、ここには友軍機が約四〇機ほども

したが、これもこの空襲により全滅です。迎撃に五機、六機と飛び立ちましたが、向こうは一三〇機の大軍ですから、到底太刀打ちできず、みるみるうちに友軍機は撃墜されて跡形も無くなり、飛行場に残っていた飛行機も、いずれも焼かれてしまい、空軍力はゼロになってしまったのです。

そのような状況下、今度は我々は生きるためにはどうしたら良いかと、それが緊急の課題となりました。そしてまず米軍は、ニューギニアから我々のところへ移動してくるであろうと考えました。島の先端で監視兵が敵の無線を聞いていますと、戦艦、航空母艦、輸送船など五〇〇隻の船団が北上中であるとのことでした。我々は海岸線の防備のために塹壕を掘り、また移動するための交通壕を掘って「今来るか、今来るか」と、大変恐怖を持って待っていたのです。

さらに地雷を埋め、飛行場の弾薬庫からあるだけの二〇〇キロ爆弾や魚雷を持って来て、夜を日に次いで、海岸線へ地雷として埋設しました。それは瞬発信

管ですから触るとすぐ爆発するように装置して、それをバナナ畑、椰子畑等に敷設して、敵の上陸に備えました。

このように敷設した機雷でしたが、後で考えると到底無駄な話でした。米軍は上陸する前に、海岸線の平坦地を一週間にわたって艦砲射撃と爆撃できれいに地ならしをしてから上がってくるのですから、海岸線に陣地を敷いていても、到底防ぐことは出来ません。

われわれ工兵隊も、上陸して間もなく歩兵部隊に編成され、三八銃を持ち、二〇ミリ機関砲と擲弾筒が配備されました。しかし、もともと訓練不足のにわか歩兵部隊ですから、割合危険度の少ない地域を割り当てられたようですが、海岸の波打ち際から少し入った椰子林にまず塹壕を夜に口を次いで掘りました。たまに椰子林に海軍の部隊が残っていた小さい椰子葺きの小屋がありましたので、そこで休憩をしながら、一人一〇メートルから一五メートルの範囲を受け持つという大変心細い配備でした。そしてこの海岸線の配備がひと通り出来たら、今度は奥地へもう一つ陣地を

造り、最後にはジャングルの遙か奥の方の小高い山に陣地を造りました。

ここは珊瑚礁の島ですから、先ず井戸水を確認してからでないとも部隊の移動が出来ません。醤油、塩、味噌なども全部無くなりました。そこで、さつま芋の蔓がありましたので、それを約三〇センチぐらいに切って、ジャングルを開墾して、一人二反歩、三反歩の畑を確保すれば、芋で命はつなげられるのではないかと、いう目算の下に芋作りが始まったのです。

ここは赤道直下のところで温度が高く、毎日毎日スコールがきます。それで大体三カ月程度で芋ができるであろうとっておりました。しかし温度がいい、お湿りがあるということでも二〇メートルも三〇メートルも蔓ばかりが伸びて、いざ三カ月経って掘ってみると、芋はただの一本もなっていない。これでは困ったと、さつま芋の心を摘んで、葉も摘んで、苗木を作って、次の畑に植えて、蔓が成長しても一メートル半くらいの長さまでに止めて、ということでも毎日そのさつま芋の芯摘みをしました。そして三カ月後に

は二、三本のさつま芋がなって成功しました。二回収穫して、三回目にはまた期待して三カ月後に掘ってみますと、今度は一本もなっていないません。肥料不足で葉ばかり伸びて芋がならなかったのです。こういう訳で、我々はさつま芋で腹を満たすには完全に一年近くかかったのです。

そのほかに南瓜がやはり蔓が張っておりまして、三〇センチほどに切って開墾した所に植えました。南瓜の方は二、三個なってくれました。さつま芋ばかり食べていた時に南瓜を蒸して食べた時の南瓜の美味さ。今、南瓜を蒸して食べてもあまり美味いとは思いませんが、当時は海水をドラム缶で炊いて作った塩を舐めながら食べたさつま芋、さつま芋の葉、南瓜は美味しかったものでした。

そしてバナナも相当ありました。このバナナも黄色くなるまで置いておいて食べると大変味が美味しくなるのですが、バナナは黄色くなるまで置きますと、小鳥が突っついて食べてしまいます。それと同じくパイアの実も黄色くなる小鳥がきて食べてしまいま

す。ですからバナナの場合は、青いうちに切り倒し、二人掛かりで担いできた大きい房を穴を掘って敷き詰めて、その上で焚き火をして温め、土を掛けて置きますと、一週間で渋味が抜けて、どうにか食べられる状態になります。毛布などに包んで暖かい日差しの中に並べて置くと甘くなるのですが、甘くなくても渋味がなければ結構食べられました。

こうしてバナナを食べましたが、バナナは一度なった木には二度とならないのです。元から倒してしまつて、その後には後葉が出て、それが伸びてまたなるのです。そして半年以上経たないと次のバナナはならないので、あまり期待はできませんでした。バナナの芯の柔らかいところを採って食べましたが味も何もない、これほど味の無いものは食べたことがありません。

そのほか驚いたことにバナナ林の外れの方に大きい木が一本だけ立っていました。ちょうど五、六メートルまで伸びていた木ですが、何だろうと思って下へ行ってみますと、それは茄子の木です。茄子は冬がないために成長を続け、五年も十年も経ってこんな大き

い木になったのです。梯子を掛けなくては採れません。採って食べたところが皮が堅くてとても美味しいという訳にはいきませんが、まあ大勢の兵隊ですから皆に少しずつ配給して腹の足しにしました。

パイアは今、スーパーへ行くと売っていて懐かしいのですが、ちょっと変な臭いがありますので、還って米から今だに私は食べたことがあります。しかしあれを見ると、パイアにも大変お世話になったなと想い出します。海岸線が危険だからと第二のジャングルの中の陣地を造った時にも、パイアの木があちこちに随分ありました。小鳥が黄色くなったパイアの実を食べて、糞を山の中へするので、パイアの木が多いのです。これは大変気候に合っているらしく、上から下まで数え切れないほど鈴なりになっています。それを青いうちに採って来て、皮を剥いて、塩で揉んで、漬物代わりに生野菜として食べました。

そのほかに、椰子の実が半熟してないと皮のところから土色の液が出て、それを剥いている手に触れると指紋が消えてしまうのです。しかしそれも食べるため

にはしようがないと、塩水で食べたり、漬物にして食べました。ジャングルの中を歩いて、何か食べるものがないかと、誰も彼も目を皿のようにして歩いたものです。

このようにして、さつま芋は二回か三回目作って、肥料が無いから駄目になって別の所でまた作る。タピオカは幹を切って刺しておけば、半年はどかかって、その下は芋になり収穫ができる。これはでんぷんが多く、これから新粉餅みたいなものをつくり、我々は大変旨い旨いと言って食べました。

そのようにして食糧は確保出来ていましたが、米軍は、ハルマヘラには上陸せずに放っておいて、ハルマヘラ島の脇のモロタイ島、ちょうど佐渡島の二倍ぐらいある島ですが、そこへ米軍は大爆撃を加え二万余の軍が上陸しました。モロタイ島の警備隊は楓兵団の歩兵部隊の一個大隊が警備していましたが、たちまちにして大隊長から中隊長、小隊長以下全員が玉砕してしまいました。そのモロタイへは、ハルマヘラから船舶工兵の小さなダイハツによって前後6回も、ある程度

の食糧を運んだのですが、全員が食べるには間に合わないようでした。三〇数人の生き残りがジャングルの中に隠れていて、終戦後、助かって還ってきました。

本島の中隊は全滅状態でしたが、戦後私どもが捕虜収容所にいる時に入ってきた、耳の片方が無い兵隊がおりました。それで私どもは大変不思議に思い聞きましたところ、たまたまモロタイ島に上陸した米軍の海兵師団に斬込隊で行ったため捕まり、木に縛られて海兵隊の猛者にジャックナイフで耳の根元から切られたのです。しかしその人は運が良く、縛られていた縄を解いてジャングルの中に逃げ込んで、終戦まで生き永らえて還って来たのです。

私どもが乗って南方へ行った「対馬丸」は、私たちを送って内地へ還って来て、こんどは沖繩の学童疎開をやりました。一千数百人の子供と一般人を乗せて、九州へ向かう途中の昭和十九年八月二十二日に、五島列島の付近で魚雷攻撃を受けて沈没しております。それは私どもを南方へ運んで、僅か三カ月後の出来事です。ですので、終戦後この話を聞き、「あの対馬丸にはいろ

いろお世話になり、乗っていた学童疎開の方々も大変お気の毒だったけれども、あの船員たちも気の毒なことをした」と思い浮かべております。

先程申しましたように、私どもは約半分の兵力になってハルマヘラ島に到着したのですが、米軍はモロタイ島へ上陸して我々仲間が三カ月かかってもできなかった飛行場を一週間で使用し始めました。米軍は多くの建設機械を持っておりますし、滑走路には鉄板を敷いて、すぐ飛行場として使えるようになります。そしてハルマヘラの我々五万の兵隊が動けないように、朝から晩まで連続の爆撃をして出足を止めていたので、その間に米軍の船団はほとんどフィリピンへ進みました。我々は敵さんが上陸しないから命があったのです。

たまたま私どもが警備していた地区の沖合に小型飛行機が一機墜落しました。乗員一人がパラシュートで湾の真ん中の辺りに降りました。すると上空を飛行機が、墜落した飛行機の乗員を援護するために飛んでいました。海岸にあった他の部隊の砲台（四門）が各一

発すつ撃つと煙が多少出ますので、上空の飛行機が直ぐそれを見つけ、次の弾が出ないうちに砲台は爆撃され消えてしまいました。そのほか機関砲なども持っておりましたが、到底飛行機には太刀打ち出来ないもので、後は沈黙して様子を見ますと、モロタイ島から魚雷艇が一人の飛行士を救うために三〇分ほど来て、飛行士を収容して帰ったのを目撃しました。

そのようにして彼らは、一人一人の命を大切にしまして、我々日本軍とは随分違うなど、大変感心をしていました。

高射砲陣地がありました、その高射砲は五〇〇〇〜六〇〇〇メートルの上空までしか届かないので、一〇〇〇〇メートルで来るB29には到底太刀打ち出来ません。そして一〇〇〇〇メートル上空から絶えず爆弾を落としてきます。いつ来るかというのが私たちの思案のしどころで、飛行してくる方角と落ちてくる爆弾の音によって、あれは危ない、あれは安全だと互いに言い合って、敵の攻撃にもなれてきました。

高射砲陣地へ行きますと、大正十五年製の高射砲が

何門か並んでいて、そのそばに椰子の木を切つて来て空に向かって立てられた偽装の高射砲もありました。しかし敵の飛行機はまず高射砲陣地を爆撃して、とことんまでやってしまいます。それで、その飛行場の高射砲隊が一番酷い損害を出したのです。その時負傷して片目を破片でやられた兵隊の場合に、どういふことか、もう片方の目もくり抜かないと駄目なのだということ、両眼失明という兵隊も何人かおりました。

それに変珍しいケースとして、たまたま飛行場の近くにいた兵隊が、敵の機銃と爆弾の攻撃を受けたために、うつ伏せになっていました。そのときに肛門に爆弾の破片が入って、肛門が破壊されてしまいました。そのため腹の方から腸を引っ張り出して、ガーズとハンカチを当てて包帯のようにして暮らしている人がいましたが、よく肛門を狙って破片が飛んだものです。

私どもは食べ物はなく、骨と皮ばかり。そしてようやくやくさつま芋、南瓜ができるようになりましたが、まず爆撃の始まる前の四時ごろに、炊事当番は焼き芋

にしたり、蒸し芋にして、敵さんがくる前に炊事の煙の措置をしておきます。朝一日分のさつま芋の配給があり、一本食べると満腹です。それで十時ごろには腹が減ってまた一本噛り、南瓜、タビオカなどで命をつなぎました。

動物性のもものでは、ニシキヘビをたまたま見つけました。ニシキヘビは太いのですが長さはそうでもありません。それで私たちは小銃弾を二五発ぐらい撃ち込んだのですが、まだ動いています。それで私たちは工兵隊ですから薪割りや十字、鶴はし、スコップなどによって五〇センチくらいに切りました。それでもなお動いています。皮を剥いたところ、回りに脂肪が溜っており、「これで天ぷらをして食うべ」と言って、それを缶に入れて炊いたのですが泡になって消えてしまい、油は採れず天ぷらはゼロでした。

同じ頃、栈橋を米軍が爆撃にきました。そうしますと監視兵が栈橋の周りに魚が浮いていると言うのです。何かと見ると二人で担ぐくらいの「まぐろ」だそうですね。それを泳ぎの上手なものがロープを持って

行って縛って、二匹ほど引き揚げて来て、一個小隊約六〇人ほどの兵隊で、塩をつけて刺身を腹いっぱい食べました。まぐろの刺身だと喜んで食べました。その夕方みんな下痢をしてしまいました。刺身に塩を付けて食べ過ぎたのです。残っているまぐろは焼いて食おうと、串に通して焼いて食べた思い出があります。

また、この辺にはオオトカゲがおりまして、ちょうどワニのような尻尾まで一メートル五〇センチほどのトカゲが椰子林のネズミなどを食って生活しています。そのトカゲをワイヤロープで罟を作って獲ったのです。皮を剥かないうちはワニを見ているようで、大変気持ちが悪いものですが、手慣れた兵隊がいますので、皮をくりくり剥いてしまつて、肉だけ持つてきました。鳥肉と豚肉の中間の味でした。そういう美味しい肉も一月に一回か二月に一回ほどありました。

ニシキヘビは後にも先にもそれ一回で、なかなか数はいないものです。それに猪、黒い野豚がおります。猪はなかなか獲れず、兵隊の腹の足しになってはくれません。たまに夜中に爆発音がしますと、猪が地雷を

踏んで、我々が食う所は吹っ飛んでしまい、とても食糧の足しにはなりませんでした。

またネズミがたくさんおり、たまたま運よく私が一匹捕まえました。それで皮を剥いてはらわたを取って焼きました。これはとても臭く、私はどうにも食べる事が出来ませんでした。そうしたら戦友が「それならば俺にくれ」とガリガリと食ってしまいました。こういう人もいるんだなと思いました。

これらは一カ月に一回か二回のことです、その間に、米軍はフィリピンを落とし、沖繩へ行きました頃に、大分我々の方への爆撃の回数も減ってきましたので、魚労班を結成して、手榴弾や爆弾で魚を獲りました。手榴弾一発で最高の時は、空いた生味噌の一斗樽に十二杯の「すずき」を獲りました。また海岸線には漁師がおりませんから、どんな魚が寄ってきます。このようにして時には魚も獲りましたが、とうてい兵隊たちの栄養を満たすことは出来ず、命を繋いでいる程度であつたのです。

かようにして、ようやくにして命永らえて終戦を迎えたのですが、ここは欧州に近かったために絶えず情報が流れてきまして、終戦の一〇日ほど前から爆撃は無くなり、平穩になって、八月十五日の終戦を外国の放送で聞きました。

私どもは、今まで開墾したところで芋を植え替えた、タピオカなどを作り、また暇な時は魚も獲り、一年半、船を待つておりました。その間に、治安上悪いということ、朝鮮人、台湾人等を先に帰しまして、私たちは昭和二十一年六月に田辺港に上陸しました。

そこで驚いたことは、日本人の婦人会の方全体が美人に見えたことです。この二年間、我々は女性の顔を見たことがありません。二日目からは、どうやら冷静になって丸は丸、四角は四角と判別が出来るようになりました。

私どもと一緒に征って、支那戦線あるいは南方の戦線で数多くの戦友が亡くなっております。そして靖国神社に祭られております。二五〇万の祭神の中で今次大戦で二〇〇万の英霊が祭られているということ

す。肉親や戦友の顔を、亡くなった当時の青春時代の顔を拝殿の奥に微かに感じて、年に一度は必ず、面会をしております。